



へなぶり亡友抄

一八〇

お長屋の噂ア連中惣出して藝者になりし娘見に出る』  
何事も内證を知らぬ娘氣の帯よ着物に母のよはれる』  
中將湯買ひに下女やる小娘のなに悶えてか夜着の袖かむ』  
帳場から無用と娘手をふればいゝをんなだと天蓋の下』  
仇ッぼさ茶屋の娘の夕焼にあすも天氣と花を見あぐる

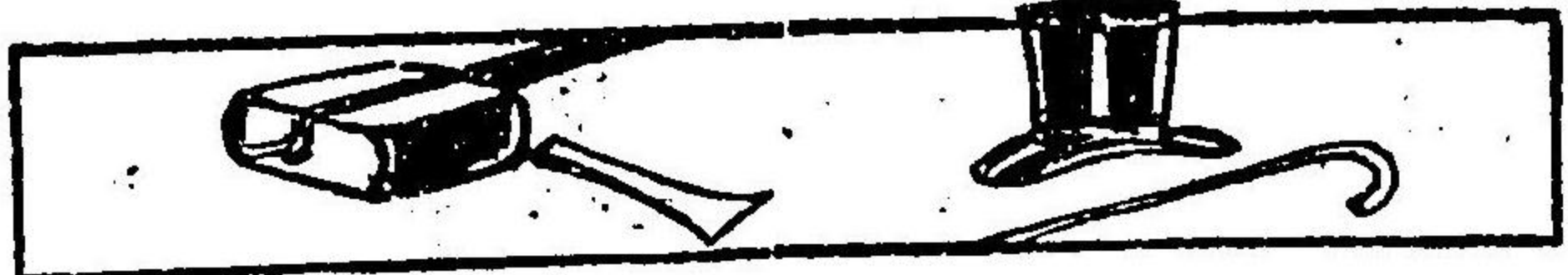
賣家

不景氣な店に賣家の札古りて熊手のおかめ獨りほゝゑむ

居候

居候樓下の笑ひの氣にかゝり鼻唄やめて又ふさぎこむ

昔の杵柄



今宵又それ者の果が店へ来て世辭で若衆丸めては行く

秋柳

堀端の柳の下に蒼白き美人笑むなり秋の夕やみ

小春

掛茶屋の婆ア六十澁茶汲み馬子を相手に笑ふ小春日

天長節

百官の菊に賀す日を大江戸の八百八街日本晴れして

妾氣質

お妾が挿花の歸りか菊さげて新屋敷町すましてぞ行く

村吏

へなぶり亡友抄

一八一



へなぶり亡友抄

一八三

菊きく作つくる村むらの役場やくばの夕ゆふぐれや髯ひげの宿直味しゆくちやくみ贈買そかひに出でる

文ぶん士し

宵張よひばりの文士目ぶんしめさめて日は十時障子じゅうじせうじに菊きくの影暖かげあたかさ

職しやく人びん

疊屋たいやが自慢じまんの菊きくにこゝ十日かや哉かなやけりのへイケイをやる

春しゆん閨けい怨えん

伽羅きやら薫かほる四疊半裡しやうはんりの春はるの宵炬燵よひこたつのしまだ夢ゆめにうなさる

京きやう上じやうり

夢ゆめのまに五十三次汽車ごじゅうさんじしやで来て爺さんおやさん婆さんばあさん五條ごじやうへ宿やどる

春しゆん夜や

春はるの宵よひゆめは何處いづこぞ手たまくらの若わかき男おとこの香かう水すいにほふ

貴き顯けん

宿醉しゆくすいの祿盜人ろくぬすびとが夢ゆめうつゝ、評定ひやうてうの席せきに欠伸あくびころして

寒かん

雪ゆきの日ひやストーブた焚たける煙突えんとつに雀三疋すずめさんびきつくねんとして

暖たん

煖爐ストーブの側そばのソーフアそふあたうつらく葉卷はまき燻くらし宇宙觀讀うちうくわんよむ

萬ばん

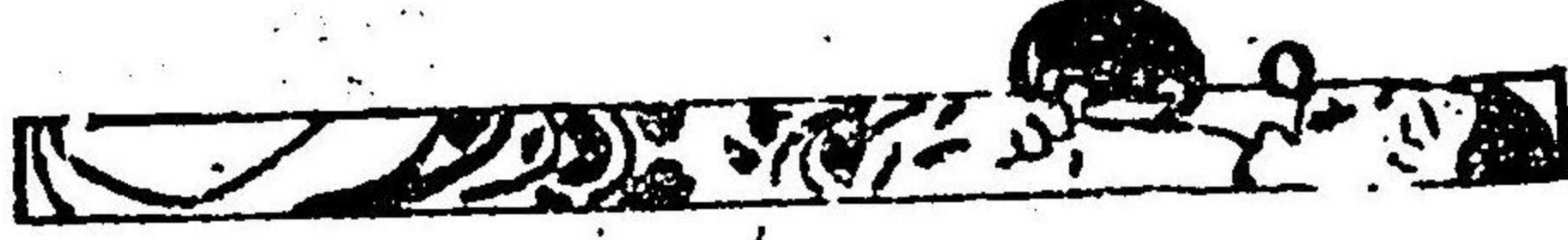
汽車きしや通とほるたびに日ひの丸まるふりたて、里さとのわらんべ萬歳ばんざいを呼よぶ

破は戒かい

へなぶり亡友抄

一八三





へなぶり亡友抄  
 山門さんもんに葦酒あししゆは、おろか爪弾つめびきて腥なまさ和尚都々おしやうど逸いっうなる

へなぶり抄

紳士

新築しんちくに成なり上ありのお里さとほの見みえて待合式まちあひしきの座敷ざしき珍ちんなる」  
 新出しんてき來きの探幽たんゆうほめる自慢じまんするお客きやくの舌したに御主人ごしゆじんの鼻はな

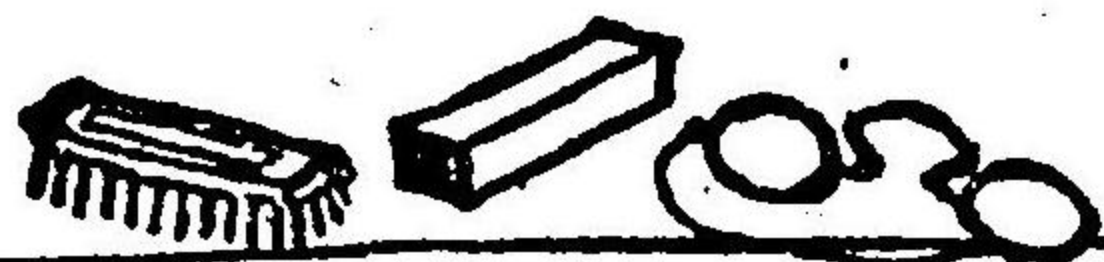
見聞

僕ぼくの宅たくは煉瓦れんが造つくりの三層樓さんじやうろう……ナニ其裏そのうちの路次ろじのムニヤク」  
 汽車きしやの中うち金縁きんぎんぎちの洋書やうしよ認たづめるやらページぺーじ繰くりては口くちをモガク

編輯局所見

へなぶり抄





へなぶり抄

一六六

いつまでも切し電話に氣のつかず返事せぬと矢鱈怒鳴りつ」  
寄稿家が世を忍びたる女名の手紙に集ふ岡妬をかしも

大海戦近し

死物狂ひなる敵艦隊の振舞こそ、片腹痛けれ。傳へ聞く歌は天地を動か  
し目に見えぬ鬼神をも泣かしむとか。まして敵艦を動かし、そこに見ゆ  
るロジエスト何トヤラーを泣かしむるは、いと易んかめれ。いざ、へな  
ぶりにへなぶり飛ばさん。南無和歌三神や、ついて御坐る荒神さま、わ  
きてはへなぶりの神も、冥護あらせ給へや。

狂言で出来し敵のボロチツクもうこゝいらでやるまいぞ也』  
千早ふる神風へなぶる神風に吹きて飛ばさん仇ふねよいぞ

媾和

ワシントン 華盛頓エツチラオツチラ出掛行き狐は取れて折箱な取られそ

頓狂子に寄す

俗曲の研究いかに頰に手の君がおもかげ惚ばるゝかな』  
五月雨るゝ今日此頃を歌澤やふるひつきたさ江戸兒の喉

同勢八人近郊に赴き、某亭に一泊して

今の世を八笑人に輪さへかけ梅雨の一夜を笑ひあかしつ』  
其騒ぎ一と村人の驚きし夜半のさはぎゆ世に無きさはぎ

歌舞伎座にキ子オラマといふを見る

キ子オラマ日本一の劇場で日本一の高いまゝごと』  
キ子オラマ泣ずに大人の遊ぶ見て何のこつたと腹も立れず

へなぶり抄

一六七





へなぶり抄

流行行

一八八

讀賣俳壇に名の高き、日野の江南といへる君、「流行は元祿踊とてして」  
との前書して「へなぶりの朴念仁や遊園扇」の句あり。

片や淺間華嚴に片や元祿とへなぶりハツケいづれ軍扇ぞ  
面白き浮世なりけりへなぶりにいざ浮き給へ元祿をどり

人に答ふ

匿名にて、へなぶり六首を書きし葉書來る。北三老人と名乗れる、長友  
某君の戯れならんか。

覆面で喚びかけられし主や誰れ北三老の聲かあらぬか  
せんぶりは胃によき薬へなぶりは笑ひ薬にならんかも君  
朴念仁のへなぶり夫よへなちよこの猪口の無患子吹は飛也

讀賣川柳會席上

高樓にドット笑ひの聲すなり川柳いまか披講すらしも

又

將門か『をなごの念がけふの今』オホン知てるよ蓄音機にて

孟蘭盆

靈柩の燈籠に泣く兒すかしつゝ若き母親をツと眼をふく

繪はがきの珍らしくも南宗畫なるが嬉しく

六法の風韻説はナポレオンのコードかと問ふ世の人ぞうさ

磯山子に答ふ

來書、自筆繪はがきに、「書に倦んで烟草のあき箱なげつけぬ雨しとく

へなぶり抄

一八七



と入梅の空」とありければ

梅雨の日を君は烟草に飽くとふか吾はひねもす筆に疲れて  
文官高等試験に、外國語を加へられたり、と聞き  
て、戯れに

斯どとは兼て覺悟もせしものゝさて外國語君はどうする』  
ワハ、リスト何かあらんの諸豪傑節を屈してリーダーを讀む』  
歳三十マア徐ろに急がんと『蟻が手をもつエンドさうして』

堺市のへな黨諸君に東す  
茅渚の海やへなぶる友の數を多み松ふく風に御名を問はや  
二長町にへなぶり商店といふが出来、へなぶり煎

餅を賣出せりと聞きて

へなぶりの世やへなぶりの商店がへなぶり煎餅嚙とぞ云々』  
珍な名のへなぶり前餅出づと聞きへなぶり黨の涎たらく

折にふれて

勘忍の鞆を拂ふて罪を問へバロス五十萬ちりくバラリ

○

罪の子と罪の子と二人會堂で又も懺悔の種なつくりそ

名古屋に歸省中の出鱈目君に寄す

恭か球か詩か川柳かへなぶりか君が歸省の日記見まほし』  
川京や黄金の鯨に光そへなぶり化せよオキヤ一セの徒



へなぶり抄

美人繪はがきに題して出征某中尉に贈る

ロスキーを屠り盡くして疾く歸れかゝる敵の君を待てれば

鹽原に在る彌二さんに答ふ

温泉に口と手いよゝ達者にしいよゝへなぶらん君し怖やの

驟雨

少女泣き雲助呼ばふ大井川篠をみだして夕立のふる

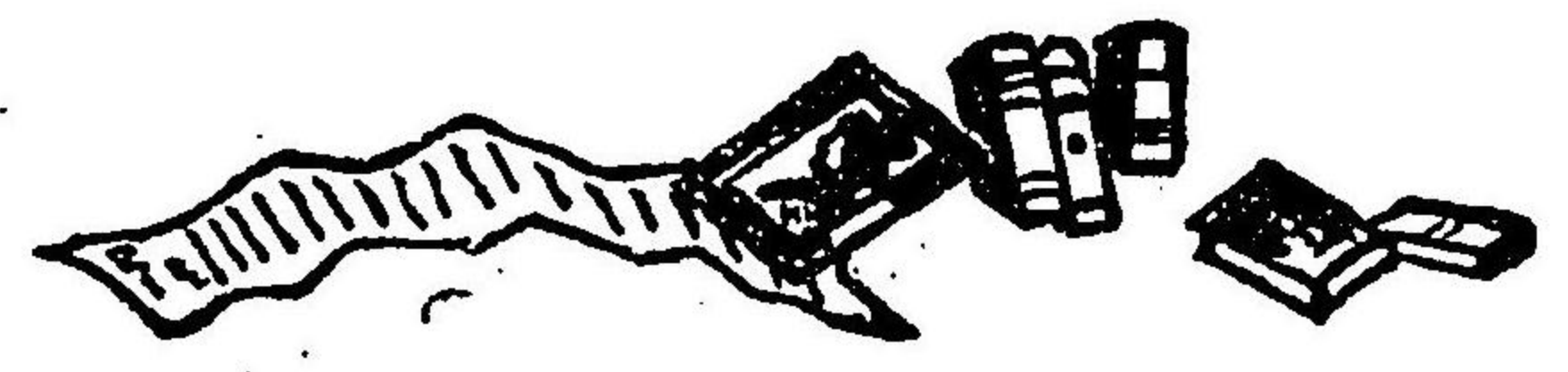
水の面に血しほ漲ぎる筑摩がははたゝ神鳴り夕立すさぶ

俄か雨大樋あふるゝ瀧つせに臂力をためす漢子雄々しも

注連張りし大木の下なる床几に、職人やらん

午睡せる繪はがきに

二三



三百の茶代にコロリ諏訪の森ゆめは千住か武藏野の風

某の大臣が、軍國多事の際に、綽々として餘裕

あるを頌して

死せる馬の骨ならなくに鯉とやら大宰相の萬金に買ふ

出門

一週間の休暇を得て、興津に遊び、轉じて箱根に赴く。毎日の雨、若く

ば曇天に、漢詩、川柳の外、へなぶり若干を得つ。

假の名を避暑と號して東海道へなぶり修業にそつと出立

吟骨の瘦せし双肩書幾冊都門を出づる影ヒヨロ長さ

汽車中所見

へなぶり抄

二三

へなぶり抄

踊りの輪

ことに

太りて

名に

立て

娘十八月

に艶な

朴山人



一六四

たわやめは海老茶ならぬよし京の娘瀛車の辨當に頬紅くして  
長瀛車に冷酒あふる父を疎み娘コップをツと奪ひ取る

日々の雨に

我れながら遠方御苦勞百マイル雨にわざく欠伸しに来つ

あとより追游の約ありし木村畫伯へ

伸び上り小手招きする清見瀉どうじや箱根の山で見えぬか

素骨子、雨中村落の繪はがきに

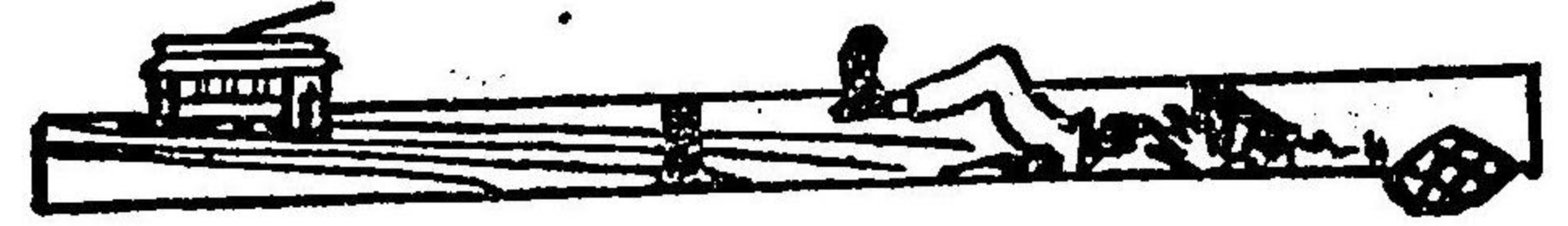
欠伸する口から直にへなぶりや雨の興津の空慕はしき

歌に發句に雨を乞ひしは事古りぬ君へなぶれや雲吹飛ばむ

と題して贈られければ

へなぶり抄

一五五





へなぶり抄

一矣

へなぶりのまづさか天とう紫痴なるか晴乞の歌驗さへ無し

頓狂亭主人より、洋人夫婦同行の繪はがき來り

手を取りて道行ならぬ避暑の旅隣りの客を羨ましつゝ

ふる雨に欠伸どころか珍鴨のお二人さんの顔が見たいな

とありし返しに

手を引いて芒尾花の振り事も今十年のむかしなりせば

珍鴨は事古りにけり二人して只つく然とへなぶり暮らす

隣室に妙な客あり

何村て生捕り來しか魔物つれ田舎酢豆腐妙に氣取れる

朱鷺色の女の扱帯ものが帯かへて結びて目尻さげたる

未知の友、藤枝の山口青丘君より來書

東海道をへなぶり修業と聞きて

中心は東京銀座低氣壓西にすゝみて駿河路あるゝ

とあり、かへし

東京の雨逃げ來れば駿河路や君へなぶるか尙もふりつゝ

偶々晴る、海中の奇巖に立ちて

巖の上にへなぶり高く唱ふれば太平洋に波たちさはぐ

箱根に轉ず。幽香子より

欠伸して天井の節かぞへ居れば鼠ひそかに喉ぼとけ見む

とのへなぶり式肉筆繪はがき來る

海の興津山の箱根と逃げ行けど斷えず追ひ來る雨脚はやき

へなぶり抄

一九七



へなぶり抄

一六

新橋の、しろと子よりは、予が髻と脛とを特に長く描きし繪はがきに

点つけの夢にうなされ目さむればへなぶりはがき雨の敷ほど

と題して、おこさる

山に海に膝栗毛馳る由もなく髻を撫しては雨に溜息

緑丸君に答ふ

行くさきくくの雨にあき、匆々歸京して、社に出づれば、幾葉のはがきあり。小石川の緑丸君よりは

當てこみし富士に嫌はれへなの祖は唯徒らにへなぶらいます

とあれど、なんのく

吾妻男へなぶり來しに羞らひて隠れし富士の女神床しも

白雪の白粉とけし咲耶姫雲の帷に身をかくしつゝ

姫路の鷺城君よりは

漁車の内何へなぶらんと見かう見へな煎餅を喰ひつ領づく海上の巖に仙人氣取してへなを誦すいとヒヨロ長きてれ客の唄ふ調子の氣に合はずへなぶり聞かせあした宿たつ

など、いろくあり

右見左見せずとも好や天地皆何へなぶりの材料ならずや』哀れとも思せ旅路の雨に欠伸隣り客には齒さへ浮かされ

堺の吞佛君よりは

清見寺に三保の松原見わたせるへな祖が姿へなちよこにして昔なら君がへな相怪しとて清見が關に止どめられしよ

へなぶり抄

一七



とありければ、負け惜みにも

願はくば清見の關にとめられて世を關守にへなぶらんが  
富士を背負ひ三保を踏へて淺黄頭巾清見の關に脂下らばや  
中秋、觀月會を秋阜吟閣に開く。是夜、  
初晴、後陰

アと呼ばふ狂喜の聲に皆立てばひんがしの空月さし上る  
明月に醉李白はた醉其角雲よびあこすへなの氣餒や

茸 狩

茸山にほる醉ふ二人をそよくとホイ秋風は禁句だつたな  
信州に遊び、善光寺に詣て、階段巡りを爲す

階段をオツカナビツクリ巡り行けば闇に聞ゆる南無阿彌陀佛

信州の讀者懇親會に文士劇を見て

表情のうまさ文士のおしろいや戀愛劇の實驗にして

懇親會の夜、發起人諸子と小集を催ふせしに、一

座皆眼鏡をかけ居りければ

ヒヨロくと日陰に生ひし青草の青さ文士や皆眼鏡なる

廣島に赴く車中にて

夜の汽車ニイキエ主義者の雄辯や笑聲たかく奇談湧くなり  
廣島の讀者懇親會席上、餘興の文士劇に、立廻  
り劇しく、過つて負傷せる人あり

文十劇寫實いよく眞に迫り糊紅さへも鮮血にして

夜、周防岩國の旅館に投じて、即景

提燈の五たび高くまた低く錦帯ばしを闇に描きて

京都にて

花屋臺京の藝子の三百人鳴川づたい囃してぞ行く

夢

荒波は艦橋うつて敵ちから提督の夢いま圓かなり

人を斬りし夢游病のむすめ涙ふき老判官を拜みく出る

吊夜具の眞紅の總に灯さしゆめ暖たから沈の香かをる

月冴えて霜白き夜半の橋の下乞丐みづから我が夢を嗤ふ

### へなぶり小論

#### 一 へなぶりの名稱

へなぶりと云へる名稱につき、予が質問を受けしこと、既に幾百千回なるを知らず。或は特に書面を以てし、或は特に予が知人に託してまでも、之を質問されしことあり。去れど、へなぶりの意義は、他も知らず、我も知らず。是といふべき意義も無ければ、まして語源などあらむやう無し。五月蠅くもやかましさ世や、へなぶりは唯へなぶりにして可ならずや。

## 二 へなぶり小史

一、明治三十八年二月二十四日、始めてへなぶりを公にす。昨年二月二十三日なりき。予が讀賣新聞社に於て執務中、面白き雜報を齎らせし者あり。餘りの可笑しさに、待ち給へ、予が狂歌をものせん、とて、不圖作りしは、戀衣の二首（第一輯掲載）なり。予實は生來未だ會て和歌を學ばず、狂歌は尙更にて、之を作りしは、實に之を嚆矢とす、乃ち盲者蛇に怖ぢず、匆卒の間に、此の咄嗟の作を當日編輯の紙上に掲げたりしなり。既に之を紙上に掲げんには、何等かの名稱を附せざるを得ず。是に

於て、又咄嗟の間に之を考へ、儘よ、へなぶりとて置かん、と出鱈目の筆を走らせしもの、遂に今日に及びしなり。世事まゝ此の如きものあり、亦可笑しからずや。

一、同年三月四日、始めて同人唱和の作を紙上に載す。予は當初、必ずしもへなぶりを永續する一定の思考ありしに非ず、唯翌日再び之を試み、翌々日又いま一度とて之を試むる内、早く既に之に唱和して、同調同體の新詠を寄せらるゝ同人諸君相踵ぎ、詠草、予が机上に堆積せしより、遂に其佳作を抜きて紙上に載せ始むるに至れり。而して遂に意外なる今日の盛運を見るに至れり。

一、同年六月十五日、へなぶり第一輯を發行す。

是れ本書の前巻にして、讀者の熟知せらるゝ所。前記へなぶり創始以來、此發行の日まで、僅かに四ヶ月に滿たず。流行の勢の迅速なりしことを見るべし。

一、同年七月十九日、へなぶり煎餅出づ。

下谷二長町に、へなぶり商店てふもの出て来て、へなぶり煎餅を嚮ぐとの報あり。同人一驚、へなぶりの流行の益々盛んなるを喜ぶ。而して此の前後より、他社の新聞雑誌、殊に各地方の新聞にまで、漸くへなぶりにてふ語、又はへなぶりの歌を見、遂にへなぶりと題する一雑誌の發刊をさへ見るに至り、日本語中、新たにへなぶりにてふ一語を加へしことを、殆んど天下に公認されしが如きの狀を呈せり。

野州鹽原溫泉に於て、古來の特産たる茶盆に、新たにへなぶり盆の名稱を附せしとか。同地より歸りし人の語りしも、亦此夏のことなりき。

一、明治三十九年一月十九日、始めてへなぶり會を開く。

同人相集まりて、へなぶり會を開かんとは、昨年夏秋の交より、故市川安坊、及び末廣翠雨その他の諸君の、屢々主唱されし所なるが予の多忙と、種々の都合とによりて、遷延し來り、其中市川君の長逝さるゝあり、漸く右の如く、今年一月に至りて、第一回の集會あり。同日午後五時より、外神田の福田屋に開き、三十餘人の來會を見たり。但、同人間に、以前より別に讀賣川柳會ありて、會員は彼

我大抵同一なるを以て、二月、兩者を合併して、讀賣川柳へなぶり會と稱し、毎月一次、之を開き、來會者概ね四十人若くば五十人に達し、以て今日に及べり。

### 三 へなぶりと時勢

へなぶり創始以來、此の如く急激に、此の如く廣汎に、非常の流行を來し、今日の盛運を見る所以は、何ぞや。此問題に關して、予の微力は、固より全く道ふに足らず。唯多數の同人諸君が、續々之に唱和し、鼓吹し、斡旋せられ、殊に其の間

幾多の俊才博識の人士が、起つて我黨に投じ、へなぶりの爲に盡くされたること、實に其の最大原因に外ならず。然れども、遠慮なく之を言へば、是れ其の原因の一にして、原因の全部に非ず。否な其の原因の主たるものは、寧ろ別に存す。他なし社會の力なり、時勢の力なり、文學上自然の要求なり。蓋し我邦の文學上、最も幼稚なるものは、滑稽文學にして、近時各種の文學盛んに起りしも、依然として尙振はざるものは、亦滑稽文學なり。故に今日に於て、最も勉めざるべからざるは、滑稽文學の振興なること、文學上自然の要求にして、今日の社會、今日の時勢は、既に之を覺知し來りしなり。而してへなぶりは、恰も此際に出

づ。是れへなぶりが、期せずして盛運を見し所以の一なり。  
且夫れ、一國の文學は、其國の言語を基礎とするは、當然なるに、  
我邦文學中、散文のみは、時勢と共にする言語の變遷に従ひ、其時  
代時代の言語を以て、用語と爲し來れるも、歌は之に反し、毫も時  
勢、言語の變遷に頓着せず、所謂雅言の名の下に、何時までも古代  
の言語、今日に在りては既に死語となりし言語を以て、用語となし、  
之を改むることを爲さず、随つて死語を連ねし歌は、之を誦するも、  
用語の上より、何等の響をも、今人心中の琴線に與へざるのみなら  
ず、其歌の内容其のものも、亦用語に束縛せられて、今代實際の思  
想を歌ふ能はざるに至れるもの、滔々皆是なり、是に於て乎、所謂

新派和歌起り、又新詩起りてふもの出て、此等は何れも今代の言語を  
以て用語となせしこと、實に一大進歩なり。然れども、弊害は早く  
も此等の上にも生し、古代の死語を排斥せしは大いに可なるも、同  
時に、今代普通の言語を用ゆることを屑よしとせず、勉めて新奇を  
衒ひ、果は一種異様の用語を以て、所謂白痴嚇しを爲し、爲に普通  
の常識ある者、學識ある者すら、其の何を歌へるやを理解し得ざる  
ものさへあり。遂に新派和歌の用語、新詩の用語とし云へば、一  
種特別の用語あるもの、如く感ぜらるゝに至り、舊派和歌と相對し  
て、兩極端を成すに至れり。既に極端に陷るゝ、文學が其國其時  
代の言語を基礎とすべき約束には、漸次に背き來るなり。而してへ



なぶりは、又恰も此際に出づ。是れへなぶりが、期せずして盛運を見し所以の二なり。

#### 四 へなぶりの本領 (其一、用語)

然らば則ちへなぶりの本領は如何。是れ前輯に於て、既に説きし所なるも、尙其の詳かならざるものあり、往々世の誤解を招くを以て再び之を一言せむ。

へなぶりの本領は、二あり。一は用語、二は滑稽。由來へなぶりは滑稽を主とするも、必ずしも滑稽に限局せず、即ち

へなぶりには滑稽多きも、滑稽なきものはへなぶりに非ず、と云ふは誤りなり。果して然らば滑稽なくして、何處にへなぶりの特色を存するや。他なし、用語是なり。我邦今日普通の言語を以て、用語とすること、是なり。

總て文學が、其國其時代の言語を以て、其の用語となすべきことは前に言へる如く、當然の約束にして、廣き意味に於ての詩歌、皆然らざるを得ず。故に我邦今日普通の言語を以て、用語と爲すの一事は、本來へなぶりの特色とすべきものに非ず。但だ如何せん、今日我邦の詩歌は、此約束を守らず、若くば之を守ることを知るも、特に理解し易からざる新奇の語を弄するもの多きこと、前述の如くな

るを以て、此當然の約束、平凡の條件を以て、特殊の旗幟とし、之を主唱するのへなぶりが、今日に存立すること、亦已むを得ざるに至るなり。

是故に、へなぶりは主に滑稽を旨とするも、滑稽なきものはへなぶりに非ず、とするには非ず。假令此の滑稽なきも、普通の言語を用ひしものは、皆へなぶりとすべく、殊にへなぶりは、最も通俗なる言語をすら用ゆべく、寧ろ好んで之を用ゆるを本旨とす。即ちへなぶりは、一種の滑稽文學たると同時に、又最も通俗なる、最も平民的なる、國民文學たるなり。予輩は彼の雅言といふものを嗤ひつゝあり。所謂舊派歌人は、専ら

雅言を貴び、雅言に非ざれば歌に非ず、と爲せり。然れども雅言とは、其實死語の謂に外ならず。試みに想へ、萬葉の用語は、雅言中の最も雅なる言語なり、而も萬葉時代に溯れば、當時普通の言語以外に、別に雅言として、彼が如き一種の用語ありしか。其の然らずして、萬葉の用語は、當時普通の言語なりしこと、疑ひを容れず。是れ文學として當然の理に屬し、萬葉と古今と、用語の差異あるは、萬葉時代と古今時代と、普通の言語に差異ありしに由る。果して然らば、明治の今日は、今日の言語を以て、歌の用語とすべきこと、論なき所にして、唯だ今日普通の言語中、其の特に高尚馴雅なるもの、みを用ゆるを、通常の和歌とし、雅俗高下の別なく、牛溲馬勃、

盡く採りて以て自家薬籠中のものとなすを、へなぶりとするの一  
 差異あるのみ。へなぶりが想の滑稽を外にして、尙其の生命を有す  
 る所以は、一に茲に在り。  
 同人間、近來のへなぶりの諸作を見て、想の滑稽なきが爲めに、之  
 をへなぶりに非ず、と爲すものあり。是れ稍や速了を免れず。故に  
 一言之に及ぶ。

### 五 へなぶりの本領 (其二、滑稽)

用語は、事専ら形式に關す。而して予は形式上、右用語の約束さへ

全ければ、其の想の滑稽の有無に關はず、之をへなぶりとして妨  
 なしと信ず。故にへなぶりのへなぶりたるには、必ずしも想の滑稽  
 を、缺ぐべからざるの要素とせず。然れども假令形式上の約束に違  
 ふも、其想にして滑稽ならんか、そは固よりへなぶりなり。即ちへ  
 なぶりは、形式上の條件と、内容上の條件と、二者の中、其一あれ  
 ば則ち可なり。若し二者俱に備はらば、更に可なるや論なし。  
 然らば滑稽とは何ぞや。是れ前輯既に説きし如く、専ら内容即ち想  
 の滑稽を主とし、縁語、掛詞、其他文學上の巧行等は、寧ろ之を排  
 斥するなり。

古今集以降、天明の盛時に至りても、誹諧歌其他の名に負へる狂歌

が、多く文字の末に奔りしは、最も歎すべき事實にして、滑稽の本義は、是より漸く廢るゝに至りしなり。而して此が原因は種々あるべきも、少くとも其一に算ふべきは、多數の人士が、題を設けて狂歌を詠せしこと、及び其際に於て着想點を誤りしことに在り。言ふまでもなく滑稽は人事の一面にして、滑稽を求むるは人事の上にて於てすべく、山川草木其他の自然の上に於てする能はず。故に實際上人事の滑稽を見聞して、之を詠出せんには、固より想の滑稽を得べきも、狂歌會等の催ふしありて、席上課題を出だし、題に依りて趣向を立てんに、文字の技巧を弄するは易さも、内容の滑稽は想ひ及び難さより、勢、難さを棄て、易さに就くに至る。殊に其課題

又は他人より依頼さるゝ題詠等は、山川草木其他の自然を借るもの多く、鶯と云ひ、郭公と云ひ、柳と云ひ、竹と云ひ、此等のものゝ上には、如何に求むるも滑稽の分子あらんやう無く、到底想の滑稽を得る能はざるを以て、又奔りて文字の末に之く。是れ狂歌が滔々として文字一方のものと成り了りし所以なり。

故に予輩は思ふ、想の滑稽は、山川草木等の本來些の滑稽なきものゝ上より、強て之を得んとする不自然を避け、必ず之を人事の上に求むべしと。即ち柳、竹等の課題なりせば、其の柳なり竹なりに人事を配しさへすれば、茲に容易に滑稽の想を發見し得べし。何人も熟知せる事例を以てするも、柳には道風の記事あり、道風の記事は

眞面目なる事實の中に、自らなる滑稽あり、竹には竹林の六逸なり七賢なりをも配すべく、彼等が清談の藪蚊に困めらるゝことも、有り得べき事實にして、そこに自然の滑稽あり、況んやかゝる故事を借らずとも、今日日常の事實にして、柳や竹やに關聯するもの、亦目前に限りなく存在するをや。但此場合に注意すべきは、其の配し來りし人事が主となり、本題の竹や柳やが、客たる地位に落ち易き一事にして、課題の作としては、本來之を避けざるべからず。然れども更に一步を進めて之を言へば、課題は由來題を借りて練習を爲すの具に過ぎず、故に多くの場合に於ては、必ずしも爾く課題に重きを置きて、主客の辨を爲すの要なかるべし。此等の事は、其時々

の事情により、作者自ら判ずるの外なきのみ。

滑稽に付ては、又くすぐりとの別を一言せざるべからず。滑稽がくすぐりを排斥すべきは、何人も知れる所。而も社會多數の人は、却てくすぐりに興味を感ずること多し。是れ其人の幼稚なるに因るも多數を占むるは、常に此幼稚者流なるを以て、其聲は意外に高さを例とす。現にへなぶりに付ても、近來のへなぶりは、一向面白くなくなれり、とは予が屢々聞きし所にして、亦此聲の一に外ならず。近來のへなぶりは、滑稽のものよりも、非滑稽のもの却て多きは、事實にして、非滑稽のもの亦へなぶりとして妨なきは、前述の如くなるも、开が滑稽のものよりも多きは喜ぶべき現象に非ず。是れ畢

竟滑稽のものが、甚だ困難なるより、作者の之を避くるに出でしものにして、予は我が同人諸君の、爾く難さを避けて易きに就くが如く卑怯なるを信ぜず、一層力を滑稽のものに用ひられんことを祈らざる能はず。而して此點につき、近來のへなぶりを面白くなしと言ふは、暫らく已むを得ずとせんも、近來のへなぶり中、滑稽のものは、決して舊時より退歩せしに非ず、否寧ろ確かに進歩せしものにして、所謂くすぐりが漸く減じ、眞の滑稽に進みしに外ならず。ゲタ／＼の莫迦笑ひ漸く止んで、扇を掩ふて莞爾とする、品位ある一笑を得るに至りしなり。是れ我が同人の爲に辯ぜざる可からず。

## 六 へなぶりの進程

へなぶりは、我邦古來の狂歌が、極めて少數のものを除くの外、殆んど採るべからざるが爲に起る。故にへなぶりは、殆んど獨創的のものにして、顧みて學ぶべきの模範を有せざるは、當然の數たり。我より古へを爲すの快は則ち之れ有るも、困難は又茲に在り。既に學ぶべきの模範を有せず。之に加ふるに、へなぶりの獨創的な結果、何等の法則（從來の俗宗匠によりて生じ來れる、和歌、俳句等の法則の如き）を存せざるが故に、無用の束縛を感せざるの利あると共に、又紀律の節制を思はず、放縱蕩逸に陥り易きの弊あり。

四蹄風生、一日千里の駿馬は、動もすれば埒外に奔逸するの悍馬たるを常とす。是れへなぶりの前途の爲、我黨の同人の、自ら警めざるべからざる所。  
然らば則ち、へなぶりには一も摸範とすべきもの無きか。曰く否、前に所謂極めて少數のものとは、萬葉の戯笑歌と、蜀山人の狂歌中の或ものとを斥し、此等のものは、或注意の下に、以て好箇の摸範と爲すべし。

雷に然らず、古今の俳諧體、源平前後の落首、天明前後の狂歌、天保の俳諧歌等、他山の石としては、皆以て注意を拂うに足るべく、殊に修辭鍊句の上に於ては、亦少からぬ教訓を得るに足るべし。

若し夫れ蜀山人の狂歌に至りては、前輯に於ける予輩の評隲、少しく誤まれるものあり、茲に其過ちを謝して、再び一言せんに、予輩實は當時に於て、諸種の選集の書に誤まられ、蜀山の眞價を知悉せざりしなり。凡そ選集の書の輕信し難き、言ふまでも無きところなるが、選集は其の選集者自身の眼識を標準とし、諸家の作品を取捨するものなれば、不幸にして選集者其人の眼識低からんか、其の選集中に入る、所の作品は、皆劣悪ならざるを得ず。故に蜀山の狂歌の如きも、天明及び其後に於て、續々刊行されし諸選集の書に於て見る所のものは、大抵例の縁語、掛詞等、文字上の伎巧を弄せしものゝみに屬す。随つて此等の書のみ依りて、蜀山を知り得たりと

信ぜし予輩は、蜀山も亦當時多數の狂歌者流と同一圈内に在りて、一頭地を放出し能はざりしものと誤信せしなり。然るに其後間もなくして、千紅萬紫、萬紫千紅等、蜀山自著の狂歌集を得て、之を一讀するに及び、予は直ちに予の誤信を發見し、今更の如く、予の淺學寡聞に、冷汗背を沾したりき。蓋し彼が自著の集を見るも、文字上の伎巧にかゝるものが、依然多きを占むるは、尙明白の事實なるも、又徃々にして然らざるものあり。いま座右の千紅萬紫一卷を把りて、其の數葉を通覽するも、例へば

蠶させ米をくはせて花までも見よと造化のいかい御造作  
造化と造作とに、音調の伎巧を弄せし痕は、之を免かれざるも、

首の歌全躰の上に於ては、文字の上よりも、固より内容に重きを置けるものにして、他の多數の人と其選を異にせるものあり。

折々は時あかりしてからかさ疊めば又も開く五月雨  
毫も文字の伎巧なきのみか、内容に於ても、強ひて人を笑はせんとせず。名吟にはあらぬも、弊の無きは、認めざるべからず。

櫻に小町の書

日の本に櫻といへる花あれば小野小町といふ美人あり  
の一首の如き、千古の名吟として推すも妨げなく、蜀山の眞價が、遙かに貴きを知るに足るなり。

此の如く、蜀山の狂歌は、玉石混淆して、石は遠く玉より多きも而



も非常の良玉が、其の石の中に潜めることは、必ず之を認識せざるべからず。

其他多數の世人の口碑に傳はる、蜀山の狂歌及び之に伴ふ逸話は、概ね其の機智に關するものにして、彼が突然題詠を求められ、咄嗟に奇警なる狂歌の口を衝いて出てし一事は、彼が比類なき機智に富みしことを示し、彼の特色として、歎稱に値すと雖、是れ唯だ機智其もの、歎稱すべきのみ。滑稽文學としての狂歌が文學上に於ける價值は、機智の有無によりて増減するものに非ず。即ち總ての文學は、其の一轉瞬間の機智によりて成れると、五日に一石を畫き、十日に一水を書き底の、熟考と鍛練とによりて成れるとに、何等の關

係を有せず。況んや彼が機智に出づるの狂歌は、大抵亦文字上の伎巧に止まるものなるをや。

是を以て、へなぶりの模範若くは參考とすべきものは、決して絶無には非ざるも、亦太だ稀なり。故に我輩へなぶり同人は、一層の困難を自覺して、一層の精勵と烹鍊とを積み、以て其の進歩向上を謀るの外あらず。

尙予は此故に廣く諸前輩に對して、既往のへなぶりに於ける缺點短所の摘示を請ひ、併せて將來の方針の指導を求め、先づ本書の首に掲げし、三先生の示教を得たり。三面先生の苦言、花和尚先生の諷規は、既往の缺點短所を明かにされしもの、同人間或は異見あるも、

へなぶり小論 三〇

確に警醒を要すべきもの、露伴先生の諄々たる教訓は、前途の進程を示され、へなぶりの一大方針と爲すべきもの。予は我が同人諸君と共に、彼を咀嚼し、此を服膺し、以て其の示教に辜負せざらんことを期す。

へなぶり第二輯 畢

明治三十九年七月十六日印刷

明治三十九年七月十九日發行

第二輯へなぶり奥附

定價金貳拾參錢

不許複製

著者兼  
發行者

田能村梅士

東京市本郷區湯島天神町一丁目百番地

印刷者

太田音次郎

東京市京橋區西紺屋町二十六七番地

印刷所

株式會社 秀英舍

東京市京橋區西紺屋町二十六七番地

發行所  
大賣捌所

東京市京橋區銀座一丁目一番地  
東京堂 同東海堂 同北隆館 同上田屋 同百華書院  
名古屋 川瀨金華堂 京都 東枝律書房 大阪 杉本書店

讀賣新聞日就社

明治七年創刊 定價一月三錢五  
 無休年中刊 錢五拾月一稅郵 錢五十三月一價定

**讀賣新聞** は上品なる新聞にして、趣味の多方面なるを以つて特色とす。是を以て家庭の新聞として最も適當也。

▲ **論說文** は讀賣新聞の穩健なる主張を現はすものにして、政治、外交、軍事、農、工、商業を始め、文學、美術、家庭に及立論最も公平なり。

▲ **小説** は亦讀賣新聞の最も力を用うる所にして、常に文壇第一傑作家の大作家を掲げ、夙に重きを一代になせり、世人が我が讀賣新聞を以つて文壇の槍舞臺となすもの偶然にあらず。

▲ **電報** は倫敦電報、伯林電報を始め、盡く内外の要報を掲載して亦遺憾なきを期す。

▲ **雜報** は政治、外交、經濟、教育、宗教等は勿論知名人士の來往集會の事に至るまで社會萬般の出來事は細大洩さず敏速に報導す。

▲ **文學美術** の記事に精しきは讀賣新聞の特色にして、穩健なる時を掲げ、夙に斯界に於いて重きをなせり。

▲ **家庭の記事** 多きは讀賣新聞に若くものなし。家庭の改革案、讀者に向ひて温き家庭の新風味を供す。

▲ **農工商業** の記事も讀賣新聞の夙に力を用うる所にして、特に農林、養蠶、養魚等に關する記事を網羅す。

▲ **趣味の饒多** は讀賣新聞の最大特色なり、是を以つて、小品文、詩歌俳句より、川柳、一口噺、考へ物、甚、將棋等に至るまで日々の紙上を賑はしく、讀者の娛樂に供す、一度讀賣新聞を讀みたるものは終生、其の妙味を忘るゝ能はざるべし。

讀賣新聞發行所 東京市京橋區銀座一丁目一番地 讀賣新聞社

中 學 文 藝 改 題

# 中 學 雜 誌

一 日 發 行

每 月 一 回

定 價 一 部 金 拾 壹 錢 郵 稅 壹 錢  
三 月 郵 稅 共 參 拾 四 錢 ▲ 六 月 全 六 拾 六 錢

**▲ 目的** 本誌は中學校、高等女學校及び之と同程度の男女學生及び獨學生諸君の思想を高潔にし品性を涵養し且各種の學藝に熟達する最良の捷徑たらんとす

**▲ 講話** 本誌は先づ教育界學藝界に大名ある諸家及び本社同人の修養及び學藝に關する懇篤切實なる講話を載せて學生諸君の指鍼に供す

**▲ 文藝** 益人に全國學生諸君の文藝上の作品を歡迎し親切に添削し批評して誌上に掲載す種類は論說、記事、小品文、書簡文より新體詩、和歌、俳句、川柳、へなぶり并に繪畫に及び毎種に豫め課題を定めて之を募る但課題外の作品も亦固より妨なし

**▲ 懸賞** 前項各種の作品につき一等壹圓、二等、三等は讀賣新聞社出版圖書中一部を送呈して聊か其名譽を表彰す

**▲ 通信** 本誌は其一部分を公開して諸者の領分とし全國各種學校及び學生に關する細大各種の通信記事及び交詢往復の用に供し以て全國學校學生間の消息を一目の下に瞭然たらしむ

**▲ 投稿** の課題及字數行數の制限并に其締切期限其他は本誌に詳かなり

## 發行所

東京市京橋區  
銀座一丁目

## 讀 賣 新 聞 社

# 女 子 雜 誌 ム サ キ

每 月 一 日 發 行

定 價 金 貳 拾 錢 郵 稅 壹 錢

▲これ多年意を女子教育と家庭の改善とに用ゐ來りたる讀賣新聞社が、別に獨立の雜誌を發刊し、これに據りて益々平素の主張と抱負とを實行せんとするもの、言ふところ珍奇ならずと雖も亦陳腐ならず、中庸を保ち正鵠を得て、穩健なる思想を鼓吹し、豐饒なる趣味を發揮す、其内容の概目左の如し

▲講話（有名の大家に囑して實益あり趣味ある談話を掲載す）▲學術（通俗科學、通俗法律、通俗衛生等の平易なる談話）▲家庭（家政、衛生、料理、流行等）▲娛樂（改良遊戲、茶、生花等の類）▲小説（女子の讀みものに適せる奇麗なるもの、作者は當代有名の人）▲雜錄、文苑、時報等百花燎亂の觀あり

發行所 東京銀座 讀賣新聞日就社出版部

(毎月一回五日發行)

農家の福帳

# 日本農業雜誌

定價一部拾參錢郵稅壹錢△三ヶ月郵稅共前金四十錢△六ヶ月前金同七十八錢

正直なことを申しますが今まで日本にはあまり良い「農業雜誌」があり  
大福帳を授けるつもりでこの雑誌を發行するつもりで居ります、  
誌に發行するつもりで居ります、書いてある事は皆有益な事面白事は  
誌に發行するつもりで居ります、

發行所

東京市京橋區銀座

讀賣新聞社

法學士河上肇著

虛遊軒  
文庫  
第二編

## 尊農論

定價 上製 七拾錢  
並郵稅 八拾錢  
郵稅 六拾錢

農業者は我が國民中最大多數を占め乍ら、自ら重んぜず從つて人に  
輕んぜらるゝこと久し。著者久しく茲に慨する所あり、農業の尊  
ぶべき所以、農業者の自重すべき所以に就き、内  
外の學說、材料、統計等を引き來つてあらゆる方面  
より縱横に之を論じ、以て世の輕薄なる商工偏重  
論者に向つて項門に一針を加へたるものは本書なり。文章  
雄大にして議論痛快。世の苟くも事に農業に従ふものは、必ず  
先づ之を熟讀して、自己の業務が如何なる理由、如何なる  
方面に於て、國家社會の上、將又一身の利益の  
上に、重要な關係を有するやを知るべし。

發行所

東京市銀座  
一丁目一番地

讀賣新聞社

讀者新聞賣讀  
著 旻 秋 田 池

**庭家新**

**版八第々噴評好**

◎東京朝日新聞評 主婦の家庭に於ける職務責任心得等を最も平易に最も町々で記述せる有益適切な参考書たるを失はず

◎中央新聞評 日本女子の地位を高め將た女權を擴張せしめんとする著者の篤實老熟なる見地に出でたるものにて著者の女子に對する用意の周到なるを見るべし

◎女學世界評 家庭の主權者たる女子を標目とし居家處世の事より、家政、交際、教育結婚其他百般の日用行事を巨細に論述説明したるもの論旨質實、文辭流暢、新進の女子たるもの宜しく熟讀すべき書也

定價五卅錢 郵稅六錢

發行所

**社聞新賣讀**

地番一目丁一座銀京東

農科大學教授 農學博士 橫井時敬氏著

第一編 **第壹農業時論**

虛遊軒主人橫井農學博士の隨筆叢書たり。虛遊軒文庫の嚆矢たる第一農業時論は現はれたり而して其内容は現今の農業政策、農商務省論、耕地整理、灌溉事業國有、農業會合等の諸問題に關する博士の時勢を觀察するに炯眼なる凡そ農業政策の興味を有するもの、**農業改良**の路に當るものは勿論、世の經に資すること亦少からざるべき也

**見識の非凡** 創にして獨**議論の剴切** にして獨

**大文字** なる、且つ篇毎に内地及び海外の材**學生の研鑽** するに資すること亦少からざるべき也

發行所

東京京橋區銀座

讀賣新聞社

總クローリス  
金文三十一百入  
定價金八十錢  
郵稅金八錢

學の賜  
家物の賜

# 小劍その日く

三版出  
定價金拾八錢  
郵稅金四錢

小劍氏の趣味の清新と筆致の眞率とを以つて勝る『その日く』は彼れが獨特の文を捉へ、豪壯なる景趣を叙し、日々の讀資新聞に掲載せしもの三年、其の間讀者諸君より書料を提へ、蒙るる景趣を叙し、日々の讀資新聞に掲載せしもの三年、其の間讀者諸君より書料を寄せて出版を促さるゝこと數十回なるを知らず、今こゝに其の稿を纏めて、訂正を行ひ、添削を加へ、事の時事問題に涉りて、日月の経過と、もに趣味を失ふものには、盡く之を除き、約して以て三百五十篇の劍子の短文は一種の小散文詩に於て、繪畫の描す能はざらざるを以て、俳句の歌ふ能はざらざるの穿つ能はざる所をうが、進歩的亦最も健全なる讀み物として、學生の所をうたひ、川柳の其の思想は即ち最も進歩的亦最も健全なる讀み物として、學生の新時代の新思潮に觸れて高文章を簡潔明快の秘訣を學ばしむべく、趣味を吸入する品性を養ひ、併せて文章を簡潔明快の秘訣を學ばしむべく、趣味を吸入する純潔なる話柄を一家團圓の卓上に供給し得べき也。著者に關する世評左の如し。

## 『陽太』 批評

一は、冗漫といふことは、今の操觚者の通弊也。試に、その弊の由る所をたづぬるに、漢詩、短歌、俳句に、字句を練ることの素養なく、漢文、俳文の簡勁を學ぶことが出來ざるの致す所也。(中學)余は雄大の文字を愛し、かかれて、簡勁の文字を愛す。長短あはせ得たりしは、櫻牛也。小品にすぐれたるは、綠雨と小劍と也。(『太陽』第十一卷第八號「時文評」天町桂月)

## 發行所

東京銀座一丁目

## 讀賣新聞社

讀賣新聞編輯局選評  
邊審也畫

# 小品歸省

好評嘖々  
六版出來

一部定價二十三錢  
郵稅四錢

收むるところは、五十四篇の小品文、昨夏讀賣新聞社に於て募集し、集稿六千餘篇の中より嚴密なる審査を経て選拔せしものなり、之れを讀まば、清風忽ち腋下に生じて夏の暑さを忘るべく、之れを玩味せば、容易に文章を作るの手腕を養ひ得ん、各篇の終りに附したる選評者の評語は、渡邊審也氏の畫と相俟つて、亦無量の趣味を添ふ。

## 發行所

東京銀座一丁目

## 讀賣新聞社

朴念  
仁選

新版

# 新川柳抄

定價 金貳拾五錢  
郵税金 四錢

東京朝日新聞評 近來川柳々々と頻に騷立つれど多くは穿違ひの似而非風流意淺くして興乏しく狂句の本體に非ず茲に讀賣の朴子柳風狂句の本體を研め本書を選す收むる所皆世の才子の吟なれば能く世相を穿ちて妙味津津々多少凡句あるも確に新川柳の一斑を窺ふに足る川柳小論亦讀むべし

## 發行所

東京市銀座  
一丁目一番地

## 讀賣新聞社

法學士 河上

肇著

第五版出來

# 社會主義評論

定價 貳拾五錢  
郵稅 四錢

社會黨の組織今や成り、今後の運動將に如何なるべきや逆め知り難し。社會主義の研究は益々切迫の必要を感ずと云ふべし。本書は即ち多年大學院にありて經濟學を講究せる河上學士の手に成るもの社會主義に對して不偏不黨公明正大の評論を敢てし、其の起因價值乃至日本社會主義者の言論行動の當否を判別して、文章雄大、議論明確好評噴々たるもの、初版發賣後一ヶ月にして第四版を發行するに至れるを以て其價值を知るべし。

## 發行所

東京市京橋區銀座  
一丁目一番地

## 讀賣新聞社



伊藤 統 監題字  
竹越 與三郎 君著

# 比較殖民地制度

定價 並製八拾錢  
上製壹圓  
郵稅(上)八錢(並)六錢

保護國とは何ぞ、殖民  
地とは何ぞ、屬邦を統治の  
政策如何、是等の問題は近時頻

り、今古列國の制度政策を比較議論茫漠として津涯無きを遺憾  
して論ずるもの少きを以て、其議論茫漠とす、竹越三又君、此時論の缺  
點を補足せんが爲め、其平生熟著  
點する所を出して此書を著作す、宏博の學問、透徹の識見を以て、此  
解決する  
燃犀の明の如きものあり、今後日本が殖民地屬  
事と、  
者、政治家、法律家、經濟家の机上必ず一本を具  
ふるを要す。

東京銀座一丁目一番地

發行所 讀賣新聞社

## 秋旻池田常太郎著

再版

# 天才の發揮

定價貳拾五錢  
郵稅四錢

秋旻氏の『新家庭』が江湖に噴々たる好評を博し、讀者に如何なる感化  
と實益とを興へたるかは諸君の知る所なり、此書は氏が更に其本領と  
する天才の發揮に就き精細明白なる説明を興へたるもの然も此書の  
特色は空論を排して實際に就き浮華を斥けて着實を主とするの點に  
在り、願ふに天才は何人も之を有す、唯夫れ之を發揮するに否とは知愚  
成敗の由て別る、所なり、苟も明治の青年男女にして健全なる新思想  
に浴し以て大に世に貢獻し以て大に自から利せんと欲せば、『新家庭』  
と共に必ず之を熟讀せざるべからず。

## 發行所

東京市銀座  
一丁目一番地

讀賣新聞社

編社聞新賣讀

# 東京案内

美装類美本

寫眞版滿載

り入圖地新街市利便帶携

## 便利重寶必携之書

東京の事て書いて無いものは無く沿革も現状も凡て詳なり

地方に居ながら東京を知るべく地理學の参考と

### 地方の人の

名所舊跡、汽車漁船、電車、官廳公衙、病院、裁判所、商店會社工場貸席貸座敷、料理屋等の案内手續費用まで残さず説明あり

### 東京の人の

始めて東京に出づる者は必ず本書を需めて無用の損失を免れよ東京に居住する者は臺所道具に先ちて本書を需め文明の利器を利用するの方法を講ぜよ

錢六稅郵●錢五十六價定

東京 讀賣新聞社發行 銀座

## 幸田露伴選 大島寶水編

刊新

詩短

# さわらび

定價 貳拾五錢  
郵稅 四錢

昨年より讀賣新聞紙上に於て募集しつゝある短詩無慮十數萬首中より嚴密なる審査を経て選拔し約四百首の佳作を一冊に集めたるもの、短詩を知らんと欲するものは本書を讀め、短詩の作法を學ばんと欲するものは本書に就てこれを習へ、本書は諸君を教へ、諸君を親切に導くべし。

▲卷頭 幸田露伴氏の長論文あり▼

## 發行所

東京市銀座 一丁目一番地

## 讀賣新聞社

朴念仁 著 ポンチ繪入り

へなぶり

定價金拾八錢

郵税金四錢

肩の張る尻理窟や長い文句は夏向の禁物なり箸の轉げたにも笑ふ若い方は勿論苦虫を噛んだお爺さんをも笑はせんには此「へなぶり」こそ好かれ「へなぶり」は本社ほんしゃの朴念仁ぼくねんじんが狂歌きやうか一變いへんの大望たいぼうを企て自ら詠出よみだして新狂歌きやうかと全國各地吟友ぎんゆうの唱和しやうわとを載せ狂歌改良論きやうかかいりょうろんを加へしもの此夏このなつをへなぶりにへなぶりに送らんも亦妙まためづならずや

發行所

東京京橋銀座

讀賣新聞社